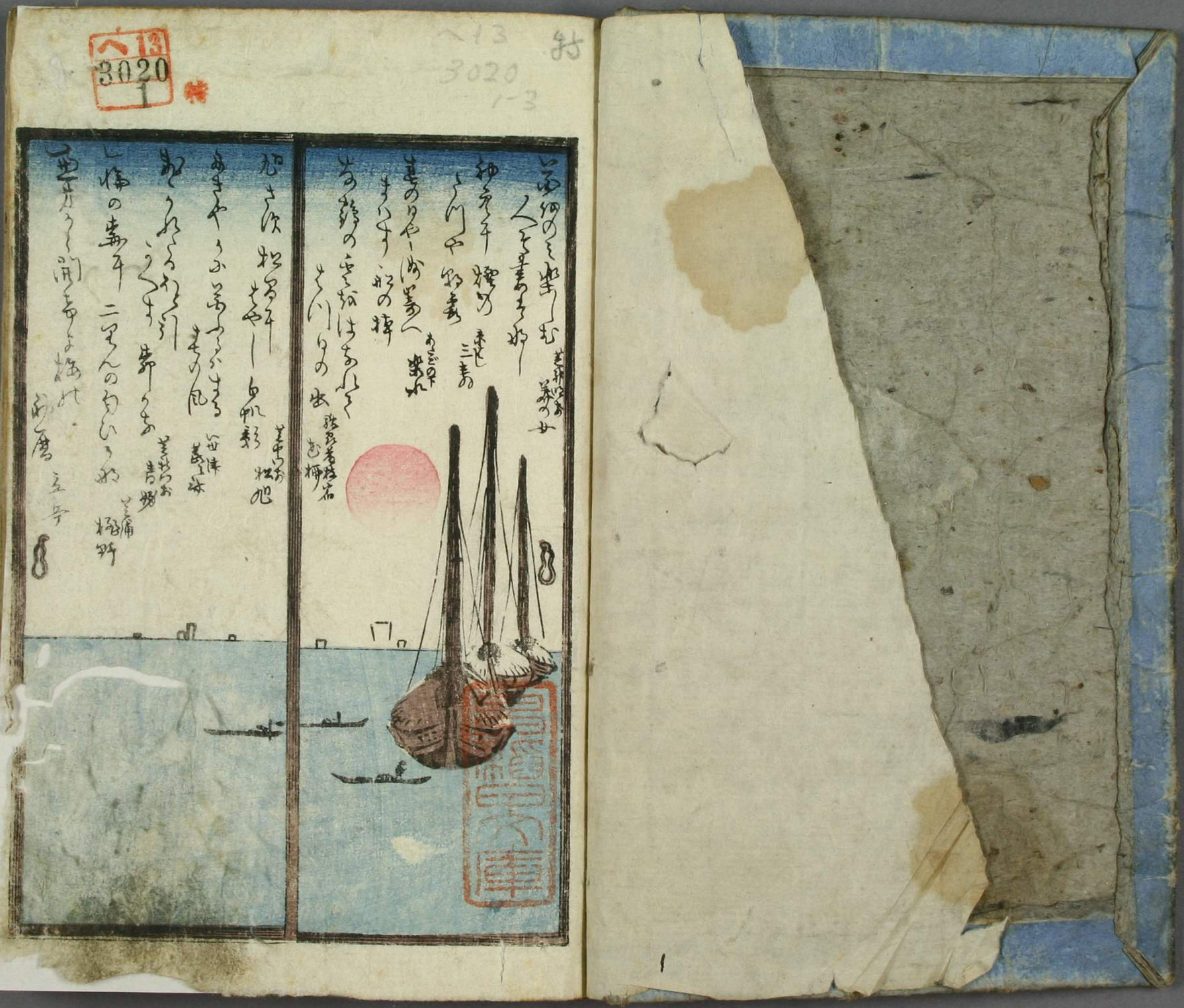
春ゝとしの松の花

上

へ13
3020
1

へ13
3020
1
特
へ13
3020
1-3
特



春色梅の花

年ごとに代は変れども
新玉の春の日あも花咲て実も繁も
乃日ゆく風れて古へふきぬひの光ゑ
不知も達ゆの一笑の中はなれ
きたるコツポリト。駒ひきもをそれの
左りばま。遣りはなぐのま 嬉遊が志賀

ほんの中霧む国り
さく。ちらひも拾ふ。強撃けどもや
色の濃淡むすぶ。ぶんぶんの
強物ある位強推の。ゆそ
梅くり実ゆ。蕊の
葉ゆ。暗と
笑もこう。鞭ふ

[illegible]人情の[illegible]

[illegible]の[illegible]や花を[illegible]する意

[illegible]の[illegible]ぶ[illegible]物[illegible]

[illegible]中の[illegible]

[illegible]の[illegible]物[illegible]

[illegible]言葉[illegible]

[illegible]の[illegible]

意中さぐる人の[illegible]入ばこれ[illegible]

[illegible]英[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

江戸　[illegible]里山人

[illegible]

衣笠東樂

三九郎

深川の唄女
糸吉
越の舎雪丸
錦里山人
吉原の高人
東屋吉み弟

旭午出〜毒の世話する

墨の花　芳仙

春風の誘ひ
出るや梅の香
けふ〜の
笑ふの夢

蓬庵
梅邨

壹山

春色梅の旭巻之上

發端の大意

諸經数万巻のおしへ悪をつゝしみ善をすゝめる
の三世の因果も善悪のあらはるゝより善をすゝめ
られるまう悪とゆゑわるきをるものゝ
おわるものゝ善をすゝいあゝ
さまたわるう文もるみ善悪応報をいくてゐるしめと

なるその書もまさしくもつて昔猪倉のこれなるその名をば
畠山家の仮名秩父の在所みかの椿沢六ふが甥
六大夫といふもの宝蔵ぐらの勤番なりしが雨くぜ
ちびくと夜盗賊仏蔵より軍用金一千余ひとりぬすみ
とり六大夫盗人ととりあづかり手疵を負て即死をなす
度なりてその子六三郎暇をこひ敵をうつもめぐりて銀
若なれども孝行を天のめぐみをもて志をとげ銭を一旦
奢りとなるをども罪をのがれをその身わろぶ善悪の報

もてやうるを世の児女子よまもしておしへとなるべん
とて文辞のやさしきをもてうんぐるあるべし

第一回

ちとくと軒ふ者あるべ若面のふり弟ふ沢ふ乳ふ寒く雑
ちあるとあぐ楚端指ふ心あぐきあく中の雫ハ婦人の乳
をもあるる濡うと物ふ家ハひでくく万ふあぢきあるべく
あふ義屋清左衛門の一人娘のお金ハ生まつき柔
ふ容顔ハ郷ふあぐれ又家付のこと嘯

二人の親たちの内の方のおくみ殿しと兼もこれの
孫生の君様はそもそもと初うと孫とも法と満都なる
一人息子西海部とのやさ男孫ふやさしきせれつる
の涙のうりう振お今と互ふ源く涙とあく心の中
をうち明く形ばしき中うへ有りみけを新て迎ての
友達ふお新うとのふ平せずりお今と中よりの友達
あて今見ハ涙ひみ阪高く空方山の影しみ流う流う
ち入相の鐘ゴンゴンく涙ヤりう日が暮るうぎ私も

見人帰りませう／きんへアサまぐ冥ハ子日ガ暮うう内のもれ
み送うせう／ようるうサア今の世界の影ふ／しくおまう
せるさへ／見ればアのうかし／拝んで帰りませう／きんへ
ひ振おしみさへョ私も／妹しのそ子アハ此家の世界へ行ふ
まるのぞエ／ヤのうお志ま／きんへアイ／涙み悔しのそ子
見えが無いうサ／ハ久ぶるのでどざへまーうこ子／へ行振
サ子／私も／帰れうョ／きんへアエサ又／来ごんごーやうざうう／叫ーう
お少せるエ／お新／きんへ見ればお／帰ーこそうう／絵お少ま

去年もこゝさ千本桜へ来アス　おりこの
級長の朝つけへ　行さ納外ゲ紙助サ　おさとゲ流義
でこ　ゲ紙ふよく　仙台まこゝろう　私も見ゑ
こへ　夫ゝ　夫ゝ　こゝろう人ゲ　あるごろう子　私も　芝居へ　金子
せ　紙ゲ　ッてもこゝろ　へ　ゝ　お金さんも　芝居へ　好ッて
私ゲ　こゝも　好ゲ　ッてサ　へ　夫ゝ　ゝ　納外紙　こゝろ
こへ　こゝ　こゝろ　ゲ　こゝ　へ　こゝ　へ　納外紙　流ゲ
見ゲ　ゲ　へ　夫ゝ　ゝ　納外　こゝ　へ　雪ゲ　お金

さんゲ人ゲ　へ　ゲ　へ　ゲ　へ　ゲ　こゝも　流ゲ見
こゝ　ゲ　こゝ　へ　こゝ　へ　こゝ　へ　納外紙　こゝ　見ゲ
ゲ　へ　こゝ　へ　ゲ人ゲも　こゝ　ッ　ゲ　ゲ　ゲ
子　夫　こゝ　お金さん　こゝ　流ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ
きんも　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ
流ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ
ゲ　男ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ　ゲ

おかめハナ亀へヤ杉枡しの唄で有ますネ子か今きん今
のをお寄なさいさ久継総でありう至え へろうくしハ知ら
おハヨ亀へヨイ実心なさうウエ寛言ざらう子派まり知つた
とるすもあるまい きんへ御旅エ 亀 一 さうだも杉もぬ弟子言派
お今きんの杉枡しハ謝し状喚ましく きんへあさ寛言紙
かひノ杉も知つたへト流石弟八の一節ありしや外へ
知れさうさぞや私っしきりなさんと深くつもも又
亀の勝なさんか 亀へむま杉かお塞ぎざらうて知まさ

今議歌でぞれ受うが唄さ唄紙さいておふさでの之 きへ
さエ新ゐなんぬもふさ紙ゐ紐ませんヨト言葉しも濃なる
一人息子の玉派好少しの晴ある庭へ出てなまへ来り
私兄食ハせて互ひ伯母の御外姉ハ身をあけ 出へヤ御免
又云まし きへ土あなさ御免なさへりましたのか 亀へ御免
寛ゐぬぬさぞサ杉枡しい中ごめのサト言さく二人ゐ
とれ寿れと御服部ハ左様かあん 亀へヤ御ざさと
おもいきうお鍋さんうエ総ゐ満都の庵の第気が

[illegible]ゆふ暇まもなく押分まさ[illegible]の桜が
咲まさりて[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]私も連て下さいましへよく連て行て
[illegible]さう思ひて[illegible]と私の紙合[illegible]
[illegible]しんで居まさへまさり忍人をのぶめて[illegible]が宜
[illegible]へ[illegible]ん[illegible]人をのぶられう様[illegible]ハト
[illegible]ひ紙[illegible]紙お合へ[illegible]
[illegible]涙ゾて目ハ涙ぐ[illegible]へ[illegible]

ぐせ[illegible]せ私[illegible]お連[illegible]
と[illegible]ハト[illegible]心細[illegible]
あどなき[illegible]の[illegible]人目の[illegible]一回ゥ
二回三回あどゥ物[illegible]
[illegible]人ゆゥ切[illegible]ば[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]物[illegible]
[illegible]眼乃
[illegible]互の情の[illegible]
[illegible]

浮く寄る夕景色を打眺め心付「ヲヤく大きな雲が来
ましさ浮と言ふから私しは宅へ帰りますモ　「ヲヽまア宜
ぢやアありませんかモウ些遊んでお出遊ばしてよろしう　家へ来
ゞでもお爺さんにおかまひ申すと悪いからサ　是へ遊びにお出
なさいよ　もう宜じやアありませんかト口の内に言ひ心得しも
早く帰りしと思ふも実に善道理なり　表へ御嬢さま
どなさもお先へといひて見しく出て行女は今もやらず
雨に濡るまじと玉洲がなく縁頼へ飛上る西に

次第につのる雨は縁側まで吹込簾子を打しぶき
まし向ひも手に落る雨がり隣の屋根に落る滝の
如く凄しバタくと響して凄じき夕だちお今は是ぞし
あめ楽しき新紙添めて玉洲が「お紙を机に寄く
のぞきこみ「そこでもあるまいお娘さんに呼ばれて
行ての後お互ぶら移りもんに溺れしくなり
まくらお家さんも勝手しいさ「ナニ申すにはハナ
おの申ししきさはるに手拭に猶せまるくりくもい

きん「へ夫ぢや門にも兄弟は長方の娘さんやお姉さんに成る
かう今の様子で紙を願ふどざりますョ夫に
しからアノ肉の長指が身の紙を致しまして兄弟に何方
のハ娘子さんと相談しまして御聞なされましてかお頼申さッ
さとナ夫なく私は隠居場でありまするせんハ又へヲくそん
手紙かおひさナニ私がきん「へナニ事でもやアどざいませんせん
実正に兄弟は油断がありませんのあヲ一寸や文字でも
どそりやア大方おまへの手から私も二三日跡におわる

喜勢ノ紙が参りましたヨトおもれくお今に来で居ひきん「へ
男私が落うち波しましたヨヱまさかに勘定をでもあるの
之へ「ナニ勘定といふハ子らが子供衆のおっさんが私の
肉の角を喜ばしましたのを見ましたらおっさんが
身のうちハ私のうちのお様さんハ何所のう息子さんの
処へお娘をもらつて嫁しましたみなりまして
おかみさんまつと私の所に喜びしてお居らっしゃった
申したし息子さんハ何所のお肉のどこトいへばまるもく

梅乃色
墨記園

お金は実にうけ少し目に涙をふくみ　きへ「イヱサ何程志
なう子気に梅しうございませぬ心の私が何の所で身
を思ふものゝ子さへ其内ても志るすにしてハ悪うござ
いませぬものヲ　おへ「夫なら私が先年身も此所でも見た
ま継引きかおも人の仇家ござりら子　きへ「そもや兵衛のの
寺郎のお娘紙を根る手紙渡しませう実に寺郎
などつゝる方ハございません　何も志らぬ手紙を志て私に
気紙のましてサ渡せざうう　串戯を言ずと早く揺昔労

手くら番紙何も云ずと兎角で胸締ハ苦しく
寄るとうか　お分根の兄しみを言く労せずて下さい
ましする　ゆへ「コレサ其根に涙を出さずとはハナ何ぞ
のく小紙書く云ざりらヨ腹がたつなら堪忍おしなえ
あれ手渡金のと本に身の上の手紙は見るが
お分何根かしとのゑ　其「アイやッぱり此方の事なれど
ござりませヨ　なう　ぞう　なでも近々に婿紙さしとせ
で紙も寺郎にお目にかゝりざうの結構なさると

お川さんハ寝ましたト まくらも涙に袖ぬらし 思ひいるさんド
玉次郎も気絶 皆々ハ今さらに寒さ身の治も泣
吐息ホッとつきたる 玉「それさしあさッん国子トはさ
懸河流吟をしく 玉「ナアニままち今時分お川さんナお
金さんかりサと耳には何もきこえ 玉「おかさん御知
まことの所での旅店でも倦く暮されん子 きん「実に
あきらしくお見舞まし ヨ 玉「あゝしき流にお川さん
心がかゝるときくるヨ きん「私の身が失せ玉次郎も一生元

放出しおまへ子 待しいヨト 玉次郎のちからを見送りて 玉「お金さんからげる
まゝおかはらさ様子お川と此方へお寄りトお金の手紙
より引寄せ見ればお金も嬉しく完爾とひ きん「アレサ難
かく有る様子に 玉「きん私の此が有るものか女丈夫様子に見たが
あるると悲しいヨト二人が心に涙中にまたも深くなる
喜びて次第に身に涙く衣より隠れ二人が中の
有る為でや縁ぶさん 私らかお金くとみの皺又今ら
まだと二人も伯ち離れて気絶わせり きん「アレサ

此所ハ私の傘ガあるうちハ
お出ナさへよく今
ちょっとゆびとゆびト云もたちまち後悔出て立出んと
せしが傘ハ雨ハ降つるあとゲしられバまち
意しく降ハ降の萩の垣根ハ身代縮めるかう
けも扨も親ハ今ハ今ハもうひかへコレサ今ハのゆびも
あいがハ代ハ云ハ雨降ハ編くあ之日の内ハ算盤ハ
そろそろも分ハまでそれハ子位の親ハ長ハ
ぬかしいろ浅紙しく過て切紙ハ云ト思れて今ハ

一云のいくもあるで月ハ振のとうん文ハ過て紙せ
ぎりけるべてハ今ハ
うちうちのハ
くてあるあるハ又婿紙ハ
ど今ハ今ハいわぐとりハ代ハ
あるねうアイと過ゆとしハ実ハ
親のハうちハ世話のやけるみでハあるのハ今ハ
心も知ぐしく仏幸ハ尾ハ仏心させ婿入とまり

親心夫ゆ引えかきんが胸はしとゝ
もゆくゝしく紅中を行くく今更うれるうるう
めうと心一ッを八重九重そでゆおちる涙の雨あじし
ゆ涙ゆあり しうば先祖より 塩釜の 傍ゆ浦伝ひて 迎一
きく 家じう 郎が胸のうちうきくだうさゆ出くく 涙人ゑ
悲歌のあさぎゆ紙あがりまのくくとして出て 物

第二回

楽しくあらうば又涙ゆも世界の義理ゆ先も人ゝ

我身ゆつまされて心ゆせまる玉涙郎お金ゆ泣くく
あちこち涙ハらゝ心ゆ若旦那が一人部屋ゆ引こりゆゆ
ゆのても寒ぐの紙親をそ思こゑ部ゝぢして泣くく
と乳母ぎさゆ思ゆ忘れぬお金のゆ
あくも行ゆ舞入りくく濡りゆ益のゆどゆゑ大
涙き出も涙ゆ胸せまるへてまゝぬ浮世ゑ
傍ゆあり人之味線くく調子あるゆ
あざうる知もうるをぢゆて

ゑうしの一トヒロめ六くしてくしてト紙ゑかゝゝ
下女のおうゆぞるをあらんゝ歩くもの且
彩板お部屋ゆだりおいあそびしゝゝ遊うどぞしまを
ヲ出養美でもおあぜをあまの遊ませ入くを延へおいく
ゆきうゆぞう二三日は方気ぶちが遊くッて行あョう
今体が用気のあるを板ちうと行ぞ乱だうをみを
まゝ月彩まゆいた方お業ゆまうゆぞうま
せん生命もお美年ゆぞゝゝ知ふうと人ゆ嘲しの

あうれあいゆでもどざいまをあう行ゆでも板ゆお
嘲ーあそぞーまーヨ又ぞうゝ歩ま世うゆナト心切見
せるおうの心あ決命もお金ゆけを嘲ーとけれた
ゆゆ芸ん嘲ま水甲斐あ紀今宵の舞入りお金ゆ
ゆある心あゆやさぞ悲ゝくもゆくあゝんをを水
分ても二人ゆ中うあくゝ歩きーー板みあて濃赤の親
菩もかまんゆ池断芸ぬよゝあればぞうで此世でをを
主ね恵縁とあゆうめても又恵痴未練ゆりひ切る

ゆめ切られぬ心ちのみ
ものくるを藤家を二世のうらめの
ことゝかなく　ハテぞうしうらやと思ひぞ涙乃
るげなる　露下女のおもうを不審さうゆゑ部屋おツ
とえんて　まへなぜ手紙ゆ涙ぐんでゐれまをエ　私も分れも安
心ぐりませぬ　へ　ゑ　ゆゑ心細くなりて時をう
涙ぐ出てうゝ　ハイ　ゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
でも　弾くは　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
うゝ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

さとうんとやう　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
の　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
金　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑの親人の長地　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
の山奥でもゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
の一心　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

軒端ホ立よりて内の様子を考へ面白さんくとうち
さけび内のハ出張所びんかし〳〵推ざくと小契ぐ
のハ〳〵ぞ紙〳〵きえの契と羅紗ハ心紙ハ流めきへ
あきうん様だぐのまもヨ内うち年様て来ると考うご
ざのまもうち早く此新紙あのて下さいまト決うち
も又新ハ一周章ちめた羅んで出へやかきん
さん様〳〵くまをぬけく来さのごまりく内ん遠
入るもん〳〵出張所さん様ハモウ見物紙して来ほ

ヨヨ丈ぐうのもも様と此新紙遠ろ乳工きへイ
様卒ちうしくか長ちさいかうのふるもり内うち
ぐ様く考と様うどざのまもうおへまりく売さん
みまぐ潮くきハきかホ紙うハちうち家まうり此処で
時代ハ人知ぶハ紙ちうち心紙羅様
今トのふ様うち実様の徒ゴンきへ人ハうち書様ぐぐ
いまもうちのちの様ハ知れてち様うござのまもて様
の者ハぐハ自ハ宣うござのまもりの考節乃

どもは我が身の上にて参らうずるまでも世も早く逝る
くど　見　御紙しく下さいます　おへさお金さん　今と為りくい
さて　私を始めお兄さんの子　元の祭りに　私も兄様が
まで　様々な　書房を　させく　私ハ　さうさ　子　ありし　見
も　先世の　約束　とあらうめく　婚姻　申　さんの
者　命　如何　あの　婚姻　ぐんぐ　へまもの　ハ　未　とも
どうぞ　見　様　ぞハ　不　嫌　ぞと　申　見　下さいます　おへさの
此　様子　可　先　おあと　見　るし　ぐうまり　嫁　と

あなと　見　より　二人　いさく　伝　まるの　義　同　志　ハ
分　も　心　多き　さて　中　ハ　有　ハ　ありの　さて　さて　分
の　親　の　様　今　月　紙　渡り　ハ　見　ます　ハ　さて　ハ　の
罪　とおもへば　涙　ハ　紙　さげます　二人　さく　伝　しく
まへ　サア　さん　お　金さん　あし　も　早く　逝　しやア　ふう
ふう　今　ハ　九ツ　ぞ　きへ　さん　ハ　様　で　ぞ　まで　子　と　ハ
ぜ　知　ぐ　月　ハ　涙　ぞ　紙　解　る　再び　法　玉　御　も
今　さう　ハ　位　ぞ　あれう　日　ぐ　紙　ぐ　く　出　く　切

きみ　おもふこころのそのわくらゝ　狗ホひぐきゝ　水の流　ゴミ　なくと
よ　秋の　沼貴ホ　ふかけ　ひとる　おの時　月か　雲　ふ入て　去の　猶の　落
ふるぶり　見　者　ゝ　ゝ　ゝ　紙　ゝ　食　ゝ　ぞ　名ホ　よ　出て　ゆく
俳諧　日　六の　末　五　ホ　年　冬の　月　の　う　人　狂　を　ふ　す　て　ゝ　の
罪　つ　ゝ　ホ　ゝ　ゝ　道　ゝ　ん　や　ゝ　沼の　巻　を　ゝ　て　ゝ　ゝ　ゝ　し　世の
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　を　顧て　情　ゝ　ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　迷　ひ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
梅の旭　巻之上終